

山脇学園中学校

2023年度 入学試験問題

国語 B

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は50分間です。
3. 問題は□～四までです。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

特定の目的に向けて他者をコントロールすること。私は、これが①利他の最大の敵なのではないかと思っています。

冒頭で、私は「利他ぎらい」から研究を出発したとお話ししました。なぜそこまで利他に警戒心を抱いていたのかというと、これまでの研究のなかで、他者のために何かよいことをしようとする思いが、しばしば、その他者をコントロールし、支配することにつながると感じていたからです。善意が、むしろ壁になるのです。

A、全盲になって一〇年以上になる西島玲那さんは、一九歳のときに失明して以来、自分の生活が「毎日とはバスツアーに乗っている感じ」になってしまったと話します。「ここはコンビニですよ」。「ちよつと段差がありますよ」。どこに出かけるにも、周りにいる注1 晴眼者が、まるでバスガイドのように、言葉でことまかに教えてくれます。それはたしかにありがたいのですが、すべてを先回りして言葉にされてしまうと、自分の聴覚や触覚を使って自分なりに世界を感じることができなくなってしまう。たまに出かける観光だったら人に説明してもらいうのもいいかもしれない。けれど、それが毎日だったらどうでしょう。

「障害者を演じなきゃいけない窮屈さがある」と彼女は言います。晴眼者が障害のある人を助けたいという思いそのものは、すばらしいものです。けれども、それがしばしば「善意の押しつけ」という形をとってしまう。障害者が、健常者の思う「正義」を実行するための道具にさせられてしまうのです。

若年性アルツハイマー型認知症当事者の丹野智文さんも、私によるインタビューのなかで、同じようなことを話しています。

助けてって言うてないのに助ける人が多いから、イライラするんじゃないかな。家族の会に行っても、家族が当事者のお弁当を持ってきてあげて、ふたを開けてあげて、割り箸を割って、はい食べなさい、というのが当たり前だからね。「それ、おかしくない？ できるのになぜそこまでするの？」って聞いたら、「やさしいからでしょ」って。「でもこれは本人の自立を奪ってない？」って言ったら、一回怒られたよ。でもぼくは言い続けるよ。だって②これをずっとやられたら、本人はどんどんできなくなっちゃう。

認知症の当事者が怒りっぽいのは、周りの人が助けすぎるからなんじゃないか、と丹野さんは言います。何かを自分でやろうと思うと、先回りしてばつとサポートが入る。お弁当を食べるときにも、割り箸をばつと割ってくれるといったように、やってくれることがむしろ本人たちの自立を奪っている。病気になったことで失敗が許されなくなり、挑戦ができなくなり、自己肯定感が下がっていく。丹野さんは、周りの人のやさしさが、当事者を追い込んでいっていると言います。

③ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です。目が見えなかったり、認知症があつたりと、自分と違う世界を生きている人に対して、その力を信じ、任せること。やさしさからつい先回りしてしまうのは、その人を信じていないことの裏返しだともいえます。

社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだと論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、ある一点において、ふたつはまったく逆のベクトルを向いているのです。

その一点とは「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は

『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふうに語っています。

a は、社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して **b** は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることを意味します。

c は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、**d** とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じること。これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の自律性を尊重し、支配するのではなくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまく授乳できなかったのも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

もちろん、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりがいいことです。一〇〇%の安心はありえない。

信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思う点で、不合理な感情だと思われるかもしれませんが。しかし、この安心の終わりのなさを考えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、合理的であるということができます。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。

重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分からない。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。

B、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思えます。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけど、それでもやってみる。この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まるとき、人は利他を自己犠牲ととらえており、その見返りを相手に求めていることになります。

私たちのなかにもつい芽生えてしまいがちな、見返りを求める心。

注² 先述のハリファックスは、警鐘を鳴らします。「自分自身を、他者を

助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉^{とうすい}へと傾きかねません」(『Compassion』)。

注3 アタリの言う合理的利他主義や、「C」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえてくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしょう。めぐりめぐっていく過程で、私の「思い」が「予測できなさ」に吸収されるならば、むしろそれは④他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思います。(中略)

実際には相手は別のことを思っているかもしれないし、いまは相手のためになっけていても、一〇年後、二〇年後にはそうではないかもしれない。

にもかかわらず、どうしても私たちは「予測できる」という前提で相手と関わってしまいがちです。「思い」が「支配」になりやすいのです。利他的な行動をとるときには、とくにそのことに気をつける必要があります。

そのためにできることは、相手の言葉や反応に対して、真摯^{しんし}に耳を傾け、「聞く」こと以外にないでしょう。知ったつもりにならないこと。自分との違いを意識すること。利他とは、私たちが思うよりも、もっとずっと受け身なことなのかもしれません。

さきほど、信頼は、相手が想定外の行動をとるかもしれないという前提に立っている、と指摘^{てきさ}しました。「聞く」とは、この想定できていなかった相手の行動が秘めている、積極的な可能性を引き出すことでもあります。「思っていたのと違った」ではなく「そんなやり方もあるのか」と、むしろこちらの評価軸^{じく}がずれるような経験。

他者の潜在的^{せん}な可能性に耳を傾けることである、という意味で、利他の本質は他者をケアすることなのではないか、と私は考えています。

ただし、この場合のケアとは、必ずしも「介助^{かい}」や「介護」のような特殊^{しゅ}な行為である必要はありません。むしろ、「こちらには見えていない部分がこの人にはあるんだ」という距離^{きょり}と敬意を持って他者を気づかうこと、という意味でのケアです。耳を傾け、そして拾うことです。

ケアが他者への気づかいであるかぎり、そこは必ず、意外性があります。自分の計画どおりに進む利他は押しつけに傾きがちですが、ケアとしての利他は、小さくさまざまなよき計画外の出来事へと開かれている。この意味で、⑤よき利他には、必ずこの「他者の発見」があります。

さらに考えを進めてみるならば、よき利他には必ず「自分が変わる」と「が含まれている」ということになるでしょう。相手と関わる前と関わった後で自分がまったく変わっていないければ、その利他は一方的である可能性が高い。「他者の発見」は「自分の変化」の裏返しにほかなりません。

(一部内容を省略しました)

【伊藤亜紗『利他』とは何か】

注1 晴眼者：視覚に障害が無い人。

注2 先述のハリファックス：ジョアン・ハリファックス。ネパール・チベットなどで移動診療^{しんりょう}等の活動を行ってきたアメリカの人類学者。この前の章段で筆者が彼の考えについて述べている。

注3 アタリ：ジャック・アタリ。フランスの経済学者。

問一 — **A**・**B** に入る言葉として最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号を二度使用しないこと)

ア つまり イ しかし ウ そこで

エ たとえば オ ところで

問二 — 線①「利他の最大の敵」とはどういうことですか。本文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。

問三 — 線②「これ」の指し示す内容を「～こと。」に続くように本文中から十五字でぬき出しなさい。

問四 — 線③「ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です」とありますが、筆者の考える「他者に対する信頼」とは、どのようなことですか。最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 相手をコントロールできると自分を信じること。

イ 他者が感じる安心を常に追求し続けていくこと。

ウ 他者の自律性を尊重し、相手にゆだねること。

エ 社会的な不確実性は存在しないと信じること。

問五 — **a** **d** に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア a 安心 b 信頼 c 安心 d 信頼

イ a 信頼 b 安心 c 安心 d 信頼

ウ a 安心 b 信頼 c 信頼 d 安心

エ a 信頼 b 安心 c 信頼 d 安心

問六 — **C** に当てはまることわざを、次のア～エから選びなさい。

ア 他山の石 イ 果報は寝て待て

ウ 旅は道連れ世は情け エ 情けは人のためならず

問七 — 線④「他者を支配しないための想像力」とありますが、その説明として適当でないものを、次のア～エから選びなさい。

ア 他者と関わった後の、「自分の変化」は予測できないと知ること。

イ 他者を分かったつもりにならず、自分との違いを意識すること。

ウ 他者の意外性に接しても距離と敬意を持って他者を気づかうこと。

エ 他者が想定外の行動をとるかもしれないという前提に立つこと。

問八 — 線⑤「よき利他」とは他者に対するどのような関わり方ですか。五十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

専門学校を出て技術者として働いていた三十才の「ぼく」は、過酷な労働環境に耐えられず退職した後、秋葉原でジャンク店（電子機器のリサイクルショップ。「ジャンク」とは「がらくた」という意味。）を営む実家に戻った。両親はさびれたジャンク店を閉店して、ラーメン店やタピオカ店などに貸し出すことを考え始めていた。

週のうち三日、ぼくは店番をやることになった。

いざ店頭に立ってみて驚いたのは、かつてあれだけ人の出入りがあった店が、あちらこちら埃に覆われていることだった。昔は父がはたきを使って展示品をきれいにしていたものだが、いまはそれも滅多にやらなくなってしまったらしい。

客は二、三人いればいいほうで、たいていは一人でカウンターのなかで過ごすことになった。

買い取りや値段のつけかたは父に教わった。

コンピュータの完動品などはそこそ高値がつけられるが、多くは故障していたり、ディスプレイからして表示されなかったりする。それらは「ジャンク」として状態を記して **A** で売り払う。古い **MODE** ライブなどは、^{注2}通電だけ確認してジャンクとして売ってしまう。

動けば儲けもの、動かなければハズレ、というわけだ。

こんな店にも常連客はいるもので、特にぼくの印象に残ったのは、必ず水曜日の午前に顔を見せるカンさんだった。本当の名前はわからないが、とにかく父は彼をそう呼んだ。①何が楽しいのか、カンさんは一時

間も二時間も展示品を手にとってはしげしげとそれを眺め、動かないコ

ンピュータのパーツを買って帰ったりする。

カンさんはどうしたわけかハズレの品を好み、よく買って帰った。不思議なのは、翌週にはそれをまた売りに来ることだ。これでは金をどぶに捨てているようなものだったと思うが、とにかくそういうお客さんいた。

埃の積もったジャンク店にいううちに、もともとコミュニケーションの得意でなかったぼくは、さらに無口になっていった。「いらっしやいませ」はいらないとぼくに教えたのは父だ。客にはなるべく圧力をかけず、自由に過ごしてもらうという方針らしい。

おのずと、買い取りの場面を除いてぼくが口にするのは、ほとんど「ありがとうございます」だけになった。

時間の止まった店で貝のようになっていくうちに、だんだんと、②自分自身もジャンク品の一つのように感じられてきた。それも、通電確認されただけのハズレの品だ。（中略）

やあ！ どうしてるかな。

今回はきみのアドバイスに従って、ボスキャラを実装してみたよ。（中略）もう少し^{注3}ブラッシュアップしたら、コンテストに応募してみるから、ぜひまた感想を聞かせてくれ。

ところで、なぜ私がこんな^{注4}レトロな機種のゲームを作っているか、きみは訝しむことだろうね。この点については、私自身よくわかっていない。ただ、古い^{注5}プラットフォームの開発は、技術がまだ人の手のうちにあった時代を思い起こさせるんだ。

ことによると私は、技術を人の手に取り戻したいと願っているのかもしれない。

でも、技術を人の手に取り戻すとはいったいどういうことだろうね？

^{注6} 西田の問いかけに、返信を打とうとする手が止まった。技術を人の手に取り戻すこと。

どうだろうか。仮想通貨にしてもAIにしても、確かに技術は見えにくくはなった。それでも、どこかで頭のいい人がそれを動かしていることには違いない。

いまでも、技術は人の手のうちにあると断言していいだろう。

③ 西田はある意味でカンさんに似ている、とぼくは思った。それにしても、レトロな機種で開発をつづけたところで、西田の求める答えは得られるのだろうか。^{注7} 郷愁の先は^{注8} 隘路ではないのか。

このメールに返事を打つことはなかった。突然、父が右手が動かなくなったと訴えて救急車で運ばれていったからだ。

診断は脳梗塞だった。(中略)

そのうちにぼくは「二代目」などと呼ばれはじめたりして、すっかり店に定着しつつあった。カンさんもあいかわらず水曜にやってきては、使いものにもならなそうなパーツを買ったり、それを手放しにやってきたりした。

客がおらず一人の時間ができたときは、^{注9} AIプログラミングの入門書を読んだ。

父はリハビリの最中だったが、この時期、ぼく自身も精神のリハビリをしていたように思う。身体を壊して^{注10} ドロップアウトしてしまった身に、徐々に自信が戻りはじめていたのだ。

そのあとに来たのが、個人経営の毘だ。

もう少しつづけられるのではないか、頑張つてやっていけるのではないかとぼくは考えはじめていた。おそらくこれが、父がジャンク店をずつとやめなかった理由だろう。他方で、母がタピオカ店の夢を語る際に、ぼくはそうしたほうがよいと同調した。

次第に、④ ぼくは自分の内側に分裂を抱えるようになってきていた。

やあ！ どうしてるかな。

例のゲームはだいたいブラッシュアップできたので、コンテンツに応募してみることにしたよ。(中略)

追伸——例のパワハラ上司だが系列会社に移った。よければきみも戻ってきてくれ。

この最後の一行がぼくを誘惑した。

下書きを書いては消し、結局、ジャンク店を守らなければならないからいまは動けないと短い返事を書いた。事実、ぼくはこのジャンク店に愛着のようなものを感じはじめていた。

ところが、また男たちが店に来た。

やはり二人組だった。展示品には目もくれず、店内の四隅に目を這わせたり、小声でリフォームの値段なんかを相談しあっている。そのうちに、一人が小声で口にするのをぼくは耳にした。

「いいんじゃないか」

母にとっては残念なことに、今回の話はタピオカ店ではなくラーメン店だった。すでに別の街に店があり、それが好調なので、この場所に二号店を出したいという話しかかった。(中略)

結論の出ないままに迎えた水曜日、思わぬことに、⑤ カンさんが顔を腫

らして店にやってきた。

当のカンさんは何事もなかったかのように商品をひっくり返したり、そうすれば透^すけて見えるともいうようにじつと見つめていたりするのだけれど、ぼくは訊^きかずにはいられなかった。

「どうされたのですか」

「ああ、これなあ……」

恥^はじ入るように応えながら、カンさんが商品を元の棚^{たな}に戻した。

「警備の仕事の最中に酔^よっ払いに殴^{なぐ}られちまってよう。それで、このざまってわけだ」

「それは……」

「たまにあるんだ、そういうことが。でもいいさ、今日のこの時間、ここに来られるんだから」

慰^{なぐさ}めなどいらないという顔をされ、ぼくは押し黙^{だま}ってしまった。

それよりもカンさんの台詞に、注¹¹ラーメン店の話を思い出して胸が痛くなってきた。それにしても、だ。カンさんの素性^{じよう}はいま垣間^{かい}見られた。それでも、なぜ使いもしないパーツを買うのか。なぜ、ここに来るのを楽しみにしてくれているのか。不意に、口を衝^ついて出た。

「なぜです？」

「え？」

「あ、えっと、いや……」

ぼくが口ごもっていると、やがて何か察したようにカンさんが口角を歪^{ゆが}めてみせた。

「俺^{おれ}にはこの店しかないんだよう」

飄^{ひよう}々としているように見えたカンさんの口調は、どこか人懐^{なつ}っこいものだった。

「別に、この店でパーツをいくら集めたところで、スマートフォンができたりはしないんだけどな。それでも、ここの商品がどうしても愛らしくてね。どうしても、自分自身を重ねて見ちまってよう」
どきりとさせられた。それはまさに、ぼくが考えていたことであつたからだ。

「実はぼくもなんです」

そう明かした次の瞬間^{しゅん}、何かが決壊^{かい}した。無口でいようとするぼくはもういなかった。

身体を壊して実家に転がりこんだことや、その前は技術者だったこと、いま未来の展望が見えないこと、そうしたあれこれを矢継^つぎ早に喋^{しゃべ}った。もちろん、ぼく自身、ジャンク品に自分を重ねていることも話した。

カンさんは割りこもうともせず、うん、うん、ときおり相槌^{づち}を打つのみだった。

それからやや言いにくそうに、自分も元技術者だったのが鬱病^{うつ}で辞^やめたのだと語った。つづく話は、技術の動向や好きなプログラミング言語は何かといった内容に及^{およ}んだ。

ぼくらはとにかく喋^{しゃべ}った。

惹^ひかれあうように、とめどなくいろいろな話をした。そして思った。ぼくにはないのは未来ではなかった。友人だったのだ。西田には、そのことがわかっていた。

その日の晩のことだ。⑥ ぼくは、母に反旗^{ひるがえ}を翻した。

「店を継いでみたい」

そう、はっきりと宣言したのだ。(中略)

最初に、ぼくはパーツを集めて小ぶりのコンピュータを自作した。安いにりに、計算能力の高いボードを積んだものだ。それにAI用の開発

環境を積み、「AIプログラミング入門キット」と称^{しょう}して店頭が目立つ場所に置いた。

別に売れる必要はなかった。

いわば、寺の本尊のようなものだ。これまでの店とは一線を画する、何か象徴^{ちやう}が必要だとぼくは考えたのだった。ところが、これがすぐに売れた。気をよくしたぼくは、新たに一台作ってまた店頭に並べた。少し時間を要したが、二台目も売れた。

三台目、四台目とつづくうちに、客からの質問が来るようになった。買った方がいいが、AIのプログラミングそのものが難しい、というものだ。そこでぼくはAI開発の入門用の冊子を作り、西田に監修^{かん}してもらい、コピー本にして店頭^{かぞ}に飾った。(中略)

「これなら俺にもできそうだな」

と真っ先に冊子を買ってくれたのはカンさんだ。

思わぬことにカンさんは囲碁^ごの五段で、コンピュータを使って勉強してみることの思いついたらしい。

「驚いたよう」

とカンさんが報告に来たのはその翌週だ。

「コンピュータの着手がどれも俺の常識を外れててよう。だが、検討してみるといい手なんだ」

生き生きと語るカンさんに、ジャンク品と自分を重ねていたころの影^{かげ}はなかったが、それでもカンさんはやっぱり素性の知れない電子部品を買っていくのだった。

火曜日の仕入れも怠^{おこた}らなかった。

郷愁^{きゆう}とてけっして馬鹿にしたものではない。⑦ ぼくが目指したのは、

郷愁と新陳代謝^{しんちんたさい}だった。

AIはAIでいい。でも、これではどこか怪^{あや}しさが足りない。そう考えたぼくが次に作った冊子は、「仮想通貨のつくりかた」だった。まさか本当に仮想通貨を作るやつがいるとは思えないが、こういう冊子がしれっと並んでいるところがいいはずなのだ。

(一部内容を省略しました)

【宮内悠介『ジャンク』】

注1 MODドライブ：パソコンの中の記憶装置^{おく}のこと。

注2 通電：電流を通すこと。

注3 ブラッシュアップ：磨^{みが}き上げること。

注4 レトロ：古いものを好むこと。

注5 プラットフォーム：ある機器やソフトウェアを動作させるのに必要な、基盤^{ばん}となる装置やソフトウェア、サービスなど動作環境のこと。

注6 西田の問いかけ：技術者として働いていた時の「ぼく」の元同僚^{りよう}。古いパソコンでゲームを作ることを趣味とし、「ぼく」に開発中のゲームについてアドバイスを求めるメールが届いていた。

注7 郷愁：過去のものや遠い昔などにひかれる気持ち。

注8 隘路^{せま}：狭く、険しい道。

注9 AIプログラミング：人間に近い能力を再現するコンピュータのこと。

注10 ドロップアウト：脱落^{だつ}すること。

注11 ラーメン店の話：ラーメン屋にお店を貸し出す話が進んでいたこと。

問一 ———— A に当てはまる言葉を次のア～エから選びなさい。

ア 二束三文 イ 二者択一 ウ 四苦八苦 エ 唯一無二

問二 ———— 線①「何が楽しいのか、買って帰ったりする」とありますが、「カンさん」がジャンク品を好んで買う理由を説明した次の文

の空らんには当てはまる言葉を、本文中から八字でぬき出しなさい。

*買ったパーツで最先端^{たん}の物を作れるわけではないと分かっているが、ジャンク品と しまうから。

問三 ———— 線②「自分自身もジャンク品の一つのように感じられてきた」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 体調を崩^{くず}してもなんとか生活を続けている自分は、ジャンク品のようにはアタリかハズレか分からないと感じているから。

イ 仕事をやめることになった自分は、ジャンク品と同じように時代に取り残されているのではないかと感じているから。

ウ 無口でコミュニケーションが苦手な自分は、言葉を発することのないジャンク品と同じようなものだと感じているから。

エ 自分もジャンク品も、どこかで誰^{だれ}が必要としてくれているという点で共通していると感じているから。

問四 ———— 線③「西田はある意味でカンさんに似ている」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 最新のものにはさほど価値はないと考えていること。

イ 自分たちは技術者として優れた腕^{うで}があると思っっていること。

ウ ジャンク店には未来があるだろうと信じていること。

エ 他の人が見向きもしなくなったものに関心を持っていること。

問五 ———— 線④「ぼくは自分の内側に分裂を抱えるようになってきていた」とありますが、「ぼく」が抱えている二つの気持ちを説明した次の文の に当てはまる言葉を指定された字数で答えなさい。

*ジャンク店を 十五字以内 という二つの気持ち。

問六 ———— 線⑤「カンさんが顔を腫^はらして店にやってきた」とありますが、その説明として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア 心配性^{しやう}で、自分をさらけ出すことができない。

イ 怒^{いか}りを表に出すことがなく、常に冷静さを失わない。

ウ つらいこともあるが、この店が心の支えとなっている。

エ 理不尽^{じん}なことが起きても、この店に通うことを習慣としている。

問七 ———— 線⑥「ぼくは、母に反旗を翻した」とありますが、その理由として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア テナントとして貸し出すにしても、利益が出るか分からないのであればジャンク店を続けた方が良くと思ったから。

イ テナントとして貸し出すことも考えたが、ジャンク店が存在する意味と自分が担^{にな}う役割を見出^{いだ}したから。

ウ テナントとして貸し出すにしても、より利益を出せる店に貸し出した方が良くはないかと思ったから。

エ テナントとして貸し出すには、この場所で長年店を続けてきた父親が心から納得^{なつ}する必要があると思ったから。

問八 ———— 線⑦「ぼくが目指したのは、郷愁と新陳代謝」とありますが、「ぼく」が目指したのはどのようなことですか。五十字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『赤毛のアン』という作品は、映画やアニメ、ミュージカルにもなっている名作ですが、この物語を読み通したことはあるでしょうか。孤児だったアンが家族や友人を得る少女時代を経て、教師、妻、母親となっていく半生を描いたこの長い物語を読み切るのは、なかなかAの折れることです。

内容を知るには、実際に読まずにインターネットなどで調べる方法もあります。そうすれば、わざわざ時間をかけなくても、作者についてや、あらすじ、登場人物、他者の感想など作品の様々な情報がすぐに得られます。それらを見て、作品を分かった気になる人もいます。

B、それでは『赤毛のアン』という作品を理解したことにはなりません。なぜなら、そこには物語を読むときに想像力を働かせる余地が少ないからです。インターネットで得られるのは、物語に描かれた一人ひとりの人間や様々な場面をaカンケツにまとめた情報です。物語を読むむということは、その一つひとつをbブンミヤクからくまなく拾い、頭の中で映像化し、想像することで、人物やその背景を理解していく行為です。たとえば、『赤毛のアン』では、アンの言葉や行動に、読者は空想という彼女の生きる術を見いだしたり、それを身に付けてきた彼女の孤独や背景に思いを馳せたりします。そうした経験を重ね、アンという人物を、時間をかけて理解していきます。

物語には、行ったことのない場所、時代、異なる価値観、作者の内面、見たことのない表現など未知のものがあふれています。読むということはそれらについて想像し、理解しようとする行程でもあります。

C、物語を読むことは、わたしたちの人生を豊かなものにしてくれるのです。

問一 線a「カンケツ」、b「ブンミヤク」のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 Aに当てはまる、体に関する漢字一字を答えなさい。

問三 線「そこ」の指す内容を二十字以内で答えなさい。

問四 B・Cに入る言葉として最も適当なものを、次のア～オからそれぞれ選びなさい。(同じ記号を二度使用しないこと)

ア 一方 イ だからこそ ウ 確かに

エ たとえば オ しかし

問五 本文を通しての主張として最も適当なものを、次のア～エから選びなさい。

ア インターネットで得られるのは、物語の個別の人物や場面の描写を切り捨てて一般化された情報である。

イ インターネットでは、物語を理解するために必要な様々な情報を効率的に手に入れることができる。

ウ 『赤毛のアン』は、映像・舞台化されたものを観たりインターネットで情報を得たりせずには物語を読むべきである。

エ 未知のことを想像しながら読むという行為は時間がかかるが、それこそが作品の理解につながる。

問六 線「物語を読むことは、わたしたちの人生を豊かなものにしてくれるのです」とありますが、「人生を豊かなものにしてくれる」とは具体的にはどのようなことですか。本文の内容をふまえて、あなたの考えを述べなさい。

四 次の各問いに答えなさい。

問一 次の1～5の意味を持つ四字熟語を後からそれぞれ選び、A・Bに当てはまる漢字一字を入れて熟語を完成させなさい。

- 1 その人にふさわしい役目に割り当てること。
- 2 前置きや遠回りをせずに本題にはいること。
- 3 危機的な状況をききょう一気に立て直すこと。
- 4 うろたえてあつちへ行きこつちへ行きすること。
- 5 非常にめずらしいこと。

起 A	適 A	温 A	単 A
回 B	適 B	応 B	入 B
往 A	面 A	空 A	
往 B	腹 B	知 B	絶 B

問二 次の1～5の——線と文法的に同じ働きのものを、それぞれア～エから選びなさい。

- 1 私ばかりしかられるのは不公平だ。
ア 今にも泣かんばかりだった。
イ 一週間ばかり休む予定です。
ウ 生まれたばかりの赤ちゃん。
エ ゲームばかりしていては困る。
- 2 子どもながら大人のような話しぶりだ。
ア 昔ながらのなつかしい風景だ。
イ 卒業式では涙ながらに話を聞いた。
ウ 台本を見ながら発表する。
エ 知っていながら教えてくれない。

- 3 母から起床時間について注意される。
ア ふと過去の出来事が思い出される。
イ 提出した読書感想文をほめられた。
ウ 朝礼で先生が当日の予定を話される。
エ この服は小さくてもう着られない。
- 4 どんな小さなことでも懸命に取り組む。
ア 呼んでも返事はなかった。
イ 内心はそれほど穏やかでもない。
ウ それならだれでも知っている。
エ 兄は作家で音楽家でもある。
- 5 私の見つけた花を花びんに飾る。
ア こがらしの吹く寒い日だ。
イ いるのじゃないのと押し問答になる。
ウ ぼくは映画を鑑賞するのが好きです。
エ 緑色の帽子をかぶった男の子。